

Title	アシジの聖フランシスとカタリ派
Sub Title	St. Francis and the Cathars
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.4 (1970. 3) ,p.13(379)- 39(405)
JaLC DOI	
Abstract	In the high middle ages, various kinds of populer religious movements prevailed all over Western Europe. Among them the most powerful aud determnied enemy of the catholic church was the Cathars. They practiced the severest asceticism, living as nomads, dedicated to poverty and preaching, and wholly without resources. The people were fascinated by the Cathars, and wondered if "true monks" had at last appeared to satisfy their yearnings. However, the Catharist's teaching was not truly Christian, but a melange of material taken from Gospel and dualistic beliefs which were of Manichaeian and Gnostic origin. We find that the early Dominicans were incessantly occupied with fighting these heretics and arguing against them. Although this heresy flourished in Italy under the very eyes of St. Francis, it appeared that their beliefs neither acted upon nor influenced nor aroused the reactions of the saint and his followers. We did not find that he was fighting these heretics. It is true that St. Francis and his desciples did not undertake to fight the Cathars by means of polemical preaching. But this does not mean that he did not know of this heresy and its menace to the Catholic world. If we examine closely the texts of St. Francis' opuscles, we would be surprised to see that the whole religious life of the saint was quite a contrast to the Catharian teaching. His piety to the only one God, his admiration for all the created world including worldly possessions, his passionate love of the humanity of Christ, and his vivid experience of the real presence of Christ within the eucharist were silent but most powerful refutations to the dualism of the Catharists, This dualism rested upon the antagonism of two Gods, one of evil intent, the other of spiritually good. In this, we can surmise that St. Francis knew thoroughly about the'Catharist's teaching and its danger to orthodox Christianity. He undertook to overcome these difficulties by the example of his religious life itself.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700300-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アシジの聖フランシスとカタリ派

坂 口 昂 吉

序

常識的にみると中世盛期とくに十三世紀は、キリスト教的秩序の確立した時代であつて、人民は自明の真理として教会的信仰のうちに生きていたと考えられる。あらゆるものを聖化し、各々の本質にふさわしい地位を与える神的秩序こそ、中世盛期の基本的構造と思われる。けれどもこの時代には、社会の頂天をなす教皇と皇帝の間の対立のみでなく、クリスト教的人民の中にも、多種多様に分裂した強度の精神的緊張があつた。彼らの多数は、教会の屋台骨を根底から揺さぶる危険な議論に向いつつあつた。したがつて、教会は、この時代ほど外的に權威をもつたこともないが、また内的にこれほど危険にさらされていたこともないであろう。キリスト教的中世の化身とみられるアシジの聖フランシスも、その実、当時のともすれば反教会的・反聖職者的に傾いていく民衆の生々しい議論の中に身をもつて干与していたのである。このうちヴァルドウス派・フミリアティの如き民衆宗教運動と彼の生涯と業績が如何に関つていたかについて、筆者はすでに研究の一端をのべた。⁽¹⁾したがつて、本論ではこのような民衆宗教運動と密接な関連をもちながら、反面異質の教義的要素を濃厚にもつカタリ派異端と、聖フランシスが如何なる接触をもち、また反応を示したかを検討してみたい。

近年、歴史における外的偶性的要因よりも内的必然的要因を重んずべきだという見地から、東方より西欧社会に流入したカタリ派よりも、ヴァルドゥス派やフミリアティの如く西欧社会の内部から発生したものを重んずべきだという主張がしばしばなされている。けれどもヴァルドゥスやフミリアティの存在を前者よりも重視するということが果して許されるであろうか。教皇庁がイスラム教以上の敵と⁽²⁾考え、第四回ラテラン公会議が最も危険視し、⁽³⁾聖ドミニコがこれに対決べく新修道会をおこす決意を固めたのはカタリ派であつた。⁽⁴⁾彼らの東方からの流入経路は現在一応の説明はついているが、単にそれだけでは、この異端が瞬時にして全ヨーロッパを席捲するに至つた理由は到底つかめない。やはりカタリ派を積極的に受容し、或はむしろ内部から醸しだした要因をわれわれは西欧社会そのものの中に求めるべきではなからうか。それはともかく、カタリ派がヴァルドゥス派やフミリアティに劣らず正統派にとつて危険な宗教運動であつたとは紛れもない事実である。したがつて、聖フランシスが、これと如何なる接触をもつたかを明かにする前に、カタリ派が教会生活と正統信仰に投じた問題を明かにする必要がある。

一

十三世紀のスコラ学におけるアリストテレス復興に至るまで、クリスト教神学の理論的支柱は新プラトン主義であつた。それは最高の一者からの万物の流出と、またその根源への復帰を説く点で、汎神論的色彩の強い一元論的世界観であつた。しかし唯一の根源から万物が流出するといひ、また、同一の根源へ復帰するといつても、そこに生起するものはすべて精神的存在であつて、物質的なものはこの因果系列からはずされてゐた。或は少くとも、どうして精神的なものから物質的なものが生ずるかについての説明が不充分であつた。⁽⁵⁾そのため、プラトン主義に支えられた古代教父や中世初期の神学者たちの著作において、ともすれば物質的世界は真に実在性をもたない影のようなものであるとみなされた。さらに

は物質や肉体という仮象にまどわされて、真に実在性をもつ精神の権威を見失うところから、人間は悪と罪の世界に墮落するとも考えられた。それ故中世のクリスト教的禁欲主義の底流には、このような新プラトン主義に基く精神的一元論と物質輕視の精神があつたことは否めない⁽⁶⁾。もちろんこのような新プラトン主義的世界観は、精神と物質、善と悪という二つの實在を認めるカタリ派の二元論と全く異なるものである。しかし、物質と肉体を惡とし、それ故に厳格な禁欲を求めるといふ点では、相似た傾向をもつていた。そのためカタリ派の精神的祖先ともいうべきグノーシス派やマニ教的二元論はアウグスチヌス以来の嚴しい否定にもかかわらず、西欧世界、とくに修道院内の禁欲主義から容易に払拭されなかつたのである。まして中世盛期以降、民衆が宗教運動を開始した時、無学な彼らにとつて一元論か二元論かという形而上學的基礎が問題にならぬ以上、新プラトン主義的精神によつて養われた禁欲主義の風土は、カタリ派の種子を宿す絶好の土壌となつたことはいふまでもない。したがつて、カタリ派は新プラトン主義の民衆的表現である⁽⁷⁾とまではいえないにせよ、カタリ派發生の内的要因が、西欧クリスト教世界そのものの中にあつたことは明かである。

だがカタリ派が明確な形態をとつて西欧世界にあらわれたのは十一世紀から十二世紀にかけてであつた。それは十世紀の中葉、マケドニアの一田舎司祭 Bogomil によつて創始され、ビザンチン帝国領内に拡まり、さらにバルカンから北イタリアを経て、南フランスに定着し、そこから全西欧に拡まつたものといわれている⁽⁸⁾。彼らの間には、Niketas によつて代表される過激派から、正統クリスト教教義に近い穩健派まで多種多様の分派があつた。しかし中世盛期に、クリスト教的西欧には多かれ少かれ二元論的思想を示す祕密集会が到る所で開かれ、まもなく強力な団体形成もみられるにいたつたことは確である⁽⁹⁾。

聖フランスとの関連において重要なのは、一一九〇年より前に、彼の故郷であるアシジの周辺にカタリ派の司教区 (Ecclesia de Valle Spoleтана) ができていることである。そしてこの司教区に属するものは過激派であり、⁽¹⁰⁾したが

つて聖フランスは極端な二元論という形でカトリ派を知っていた可能性が強いと思われる。では彼らの主張とそのカトリック教会に対する脅威は如何なるものであつたろうか。

カタリの過激派によれば、善神は精神の世界を造り、この天上世界に非物質的肉体をもつ人間精神を住まわせた。また他方、悪魔と同一視される悪神は物質世界と人間の肉体を造つた。したがつて物質は精神に対し、光に対する闇、善に対する悪として対立する。さらに物質世界を造つたのは悪神であるが故に、旧約の神は悪神であり、その啓示である旧約聖書は忌わしい悪魔の律法として排斥される。そして新約聖書のみが善神の送つた使者であるクリストの純粹な靈の教えとして評価される。⁽¹¹⁾

それでは、善神の被造物である人間靈魂がなぜ悪神の所産である肉体と結合するに到つたのであろうか。これに対しカトリ派は、聖書的色彩をおびた神話をもつて答える。即ち、善神の王国の栄光を妬んだ悪魔は、ひそかに天上に忍びこんだ。そして彼は天使たちを自らのもつ宝、特に美しい女性の魅力をもつて誘惑した。情欲に燃えた天使たちの靈魂は欲望の重みで天上の非物質的肉体から離れて墜落し、地上の物質的肉体の牢獄に閉じこめられるに到つたというのである。このような人間觀から、カトリ派の救済論の中心は当然、牢獄である物質的肉体から離脱し、天上の純粹精神の世界へ復帰することとなる。⁽¹²⁾しかしこの救済過程においても、カトリ派においてクリストの占める位置は、正統教義とは甚しく異なっている。カトリ派にとつて、クリストは一天使にすぎず、その使命は説教によつて墜落した地上の仲間たちの覺醒をもたらしすることにある。即ち彼は人となつた神でもなく、救済史の中心でもない。⁽¹³⁾

特にカタリの過激派は徹底に托身を否定した。彼らによれば、クリストは天使であるが、他の墜落した天使たちと異なり、罪即ち肉体と接触をもたない。したがつてマリアも彼の肉身の母ではない。マリアもまた天使であり彼女の耳にした声によつてクリストは此の世に入り、地上の質料なしに見かけだけの肉体を与えられたのである。⁽¹⁴⁾

このようにキリストは地上の肉体をもたぬのであるから、カタリの過激派は彼の受難とか十字架上の死を現実とは考えなかつた。キリストの肉体はただ眼にみえる幻にすぎないのであるから、十字架にかかったり死んだりするはずがなく、彼の受難もその托身と同じく幻想にすぎないのである。⁽¹⁵⁾それ故人類の救いはキリストの十字架上の死と復活にあるのではなく、彼の説教を遵守することにある。即ち幻としてあらわれたキリストは、墮落した天使たちである人間の靈魂をその説教によつて天上の故郷へつれもどすのである。

救われようと欲するものは、キリストの純粹な教え、即ちカタリ派の教えを受け入れ、キリストの眞の教会、即ちカタリ派の団体に加入しなければならなかつた。その団体の中で、靈魂は特別な祝福を受け、すべての自罪はもちろん、原初における天国からの地上への墮落に始まつた原罪からも浄められ、痛悔の業を成就する。ついで地上の肉体が死ぬと、浄められた靈魂は眞直に天上の純粹精神の世界へ帰る。靈魂はここで非物質的な肉体と再び合一し、究極の幸福をうる。⁽¹⁶⁾正統教義にみられる如き、地上的な意味での物質的肉体の復活など問題になりえないのである。

このような救済論と一致して、カタリ派の倫理の主眼は物質的世界からの解放にある。罪とは物質的世界に服従することであるから、これを離脱することこそ唯一の道德的命令である。⁽¹⁷⁾それ故カタリ派は嚴格極まる禁欲的生活をした。まず個人的財産の所有は一切認めなかつた。⁽¹⁸⁾戦争及び一切の流血は罪であつた。したがつて公正な裁判権の行使や正当防衛権も認められなかつた。動物を殺すことや、肉食も罪であつた。⁽¹⁹⁾だが特に結婚と性的關係は最大の罪であつた。それは物質とのもつとも深い接触であると同時に、懷妊によつて靈魂を再び肉体の牢屋にいれる手段でもあつたからである。それ故すべての性的關係に起因するもの、特に卵や乳を食物とすることまで罪であつた。このようにカタリ派の倫理は否定と禁止項目の羅列となるに到つた。これは地上的・物質的生活を行使することを、天上の至福を享受することの前提条件として認める正統派の倫理と矛盾するばかりでなく、社会生活の全面的崩壊を予兆させるものですらあつた。

だが大衆はこのような嚴格主義に到底ついていけなかつた。それ故カタリ派は密儀的団体となり、その教えの完全な実行を、限られた成員、いわゆる *perfecti* にのみ義務づけた。この *perfecti* はカタリ主義の眞の担い手であり、*consolamentum* という按手による一種の靈的洗礼を受けて悪神とその物質から解放されて、善神とその聖靈の完全な友となつた。彼らはまた他の宗教運動の使徒的生活をする人々と同様、*boni Christiani* 又は *boni homines* と呼ばれ、民衆から尊敬された。それ故あるカタリ派の婦人たちが聖ドミニコの感化によつて改心した時、「あなたが非難の説教を浴びせられた人々を私どもはこれまで良い人々と信じまたそう呼んで参りました」(*Illos homines, contra quos praedicas, usque modo credidimus et vocavimus bonos homines.*)と告白した⁽²⁰⁾。

カタリ派の中には、その中核たる *perfecti* と並んで多数の *credentes* があつた。彼らはカタリ派の教えに帰依していたが、世俗世界にあり、結婚して生活し、私有財産をもち、法律上の訴訟や戦争を行う点で一般民衆と何ら変りなかつた。ただ彼らは死ぬ前に *consolamentum* を受けるという義務を負つていた。⁽²¹⁾ この *credentes* は *perfecti* に対し最高の尊敬を払い、彼らの生活を支持する使命をもち、⁽²²⁾ それ故に戸毎に特殊の印をつけ、自分たちがカタリ派の一員であることを示していた。*perfecti* はパンと果物と魚しか食べなかつたが、これらの食物を *credentes* から贈られていたのである。このように *perfecti* の生活が、何ら嚴格な規律をもたぬ *credentes* に支えられていたこと、また *perfecti* が個人的に抛棄した財産が彼らの教会の豊かな共有財産として保管されたことは、カタリ派の嚴格極まる清貧の主張と矛盾する一面をもつていたことは否定できない。

人間の靈魂は、*consolamentum* を受け、カタリ派の嚴格な戒律に従つて生活した場合、肉体の死後直ちに天国へもどる。しかし改心後、戒律の忠実な嚴守がおぼつかない場合には、再び罪を犯してせつかくえられた救いを無効にせぬため、彼らは断食して死んでいった。⁽²³⁾ これを *endura* という。このような行為はしばしば行われたわけではないが、自殺

を禁ずるカトリック教会の立場と甚しく矛盾するものであつた。

ヴァルドゥス派やフミリアティの如き一般の民衆宗教運動は、個人財産のみならず共有財産の抛棄という清貧と、巡歴説教という使徒的生活の新理想を追求した。しかし教義的には何らカトリック教会に反するものを持たなかつた。しかしカタリ派は、その人生觀と教義体系の本質に非クリスト教的なものを秘めていたといえる。だが彼らがその説明に多くの聖書的概念や譬喩を用いたことは、多くのクリスト教徒をして、彼らの厳格な禁欲生活をクリスト教的理想の眞の顯現とみあやまらせる結果となつた。⁽²⁴⁾特にその危険は、*credentes* が多くの場合、外面的にはカトリック教会内にとどまり、ミサにも与つていた事実によつて一層深刻であつた。即ち彼らは、カトリック教会に外面的に帰属しつつ、その一切を内面的に否定していたのである。カタリ派の見解によればカトリック教会は、その巨大な富によつて全く悪魔の国に属すると考えられた。⁽²⁵⁾教会のすべては嘘と偽善でかたまつた悪魔の創造物であつた。特に物質的印を用い、物質的世界との接觸を意味する祕跡は、善神の救霊の業を徹底的に破壊せんとする悪神の凶悪な企てであつた。したがつてすべての祕跡のうちでも特に聖体の祕跡がもつとも非難された。なぜなら、この祕跡においては、精神的な世界が物質的世界と渾然一体となるからである。⁽²⁶⁾それ故、外面的にカトリック教会に属していた *credentes* は、教会に対する極度の反感と侮蔑から生ずる無関心の念をもつてその典礼に与つていたものと思われる。これは教会の内面的精神的空洞化以外の何であらうか。しかしその一方、カタリ派は外面的にも対立教会の形成を進めていった。彼らは自らの典礼と祈りの形式を作製した。⁽²⁷⁾その儀式的中心が *consolamentum* であつたことはいふまでもない。しかし他の典礼、祝日や断食期間の制定において、カタリ派はカトリック教会に著しく似かよつたものとなつた。即ち彼らは、カトリック教会を意識的には全面的に否定しながら、無意識のうちには大幅に模倣せざるをえなかつたのである。しかしこの外面的類似は、彼らのカトリック教会に対する敵対感情をかえつて煽りたてることになつた。⁽²⁸⁾また一方、クリスト教的外觀の故に無教養で單純な民衆を、カ

タリ派の教会にひきつける要因ともなつたのである。

最後に、カタリ派の危険を増大させたものは、それが当時の多くの民衆宗教運動と結合し、その理論的支柱を与えていたことである。カタリ派は教義的意味においてこそヴァルドゥス派やフミリアティにないものをもつていたが、その実践面で多くの共通点を示していた。彼らのうち *perfecti* は、他の民衆宗教運動と同じく使徒的清貧と巡歴説教のうちに生きていた。そしてヴァルドゥス派やフミリアティが教会の権威と衝突して異端視されるに到つた時、カタリ派はその二元論的形而上学に基づく教説をもつて、民衆宗教運動の中の反聖職秩序的傾向を促進していつたのである。教会はイノセント三世以来、民衆宗教運動に対する政策を転換し、できる限りこれを教会に吸収しようとしたが、⁽²⁹⁾このようにカタリ派の教義に影響された人々を帰正せしめるのは困難を極めたものと予想されるのである。

以上の如くカタリ派は、クリスト教的色彩の外衣をまとつたクリスト教義の徹底的否定であつた。また単に教義的否定にとどまらず、教会の典礼に基づくクリスト教徒の信仰生活を外部のみならず内面からも破壊する危険をはらんでいた。そしてこれが当時進展しつつあつた一般の民衆宗教運動と結びついた時、アルビジョア十字軍の如き単なる武力行使によつては到底根絶し難い力をもつにいたつていたのである。これに対し、聖ドミニコは説教を主とする組織的な教化活動をもつて真向から対決していった。一方、聖フランシスはこの脅威に対し如何に対処したのであろうか。

二

P. Sabatier は、カタリ派と聖フランシスの関係について次のように書いている。即ち「教会のもつとも強力かつ決定的な敵はカタリ派であつた。真摯で大胆でしばしば学識あり論法鋭く、選り抜きの人物と偉大な知力をもつ人々を擁していた彼らは、十三世紀の異端のうちでも傑出していた。彼らの反抗は初期のヴァルドゥス派の如く些細なことや修徳に関

することではなかつた。それは一定の教義的基礎をもち、カトリックの全教義体系に反抗するものであつた。しかしこの異端はイタリアで、それも聖フランシスの眼前で栄えていたのだが、それについて簡単に示唆する必要があるのみである。聖フランシスの業績はヴァルドゥス派の運動から多くの影響を受けた。しかしカタリ派はそれとは全く無縁であつた。このことは、聖フランシスが教義の問題に没頭しようとしなかつた点から当然明かである。彼にとつて信仰は知識ではなく道徳の領域に属するものであつた。それは心情の聖化である。教義の問題に時を費すなど、彼にとつて無用と思われた。……したがつてカタリ派は聖フランシスに何ら直接の影響を及ぼさなかつた」と。この聖フランシスのカタリ派の教義に対する無関心を示している P. Sabatier の判断は、彼の多くの主張と同様、近代の聖フランシス研究の定説となつてゐる。しかしこの主張は、カタリ派の教義とその信仰生活が不可分離な一体をなしていたことを考えれば、新しい信仰生活の理想をかかげた聖フランシスが、果して彼らに無関心でいられたかどうかという疑問にさらされざるをえないと思われる。

事実聖フランシスはカタリ派をよく知つていた。彼の出身地の周辺は、過激なカタリ派の司教区に属していたし、一二〇三年、アシジは教皇の意に反してまでカタリ派の市長を選出したといわれている。⁽³¹⁾ 当時二十一才の多感な青年であつた聖フランシスがこの事件に関心をもたなかつたとは考えられない。⁽³²⁾ たとえこの頃、享樂と地上的名声に憧れていた彼が、厳格な反世俗的なカタリの教説にさほど関心をもたなかつたにせよ、後に彼はその教義を正確に知る機会に恵まれたことは確かである。H. Grundmann は、一二一五年第四回ラテラン公会議中に、聖フランシスが新しい修道会の認可を求めてローマに滞在していたことを立証している。⁽³³⁾ しかるに A. Borst によると、この公会議の有名な信仰告白は殆んど逐条的にカタリ派の信仰に対決するものであつた。⁽³⁴⁾ したがつて聖フランシスはこの時、教会の最大の憂慮の対象となつてゐるカタリ派の基本的信条を充分に知つたはずである。

さらにツエラーノのトマの第二伝記七八―七九節に次のような記述がある。「彼(聖フランシス)は施しを与える際に、肉体を助けることよりも靈魂をえることを求めた。そして彼は、受けることにおいても与えることにおいても、他の人々に対し自ら模範を示したのである。――彼がロムバルディアのアレクサンドリアに神の言葉を宣布するために赴いた時、神を畏れ信仰の誉れ高いある人が彼を客として接待した。この人は彼に、聖福音の掟に従つて供せられたものをすべて食べるよう求めた。彼はこの主人の信仰に心を打たれて喜んで同意した。主人はいそいそと働いて、七歳の鶏を神の人(聖フランシス)の食事のために用意した。この貧しい人々の長たる人が歡びに満ちた家族と共に食卓についた時、突然惡魔の子が戸口に現れた。彼は全く恩寵を欠き、都合のよい場合には清貧を装つていた。彼は狡猾にも神の愛によつて施しを乞い、涙声で神の名によつて助けを求めた。聖人は万物の上に祝せられ、彼とつては蜜より甘美な御名を聞いたので、喜んで供せられた鶏の脚をとつてパンの上にのせ、乞食に与えた。だが何ということであろう。この極道者は聖人に恥をかかせるためにその施しをとつておいたのだ。翌日、聖人はいつものように群衆に神の言葉を説いた。そこへかの極道者が喚きながら飛びこんできて、鶏の脚をすべての民衆に示そうとした。彼は言つた。『説教をして、お前たちが聖人のように尊敬しているこのフランシスがどんな人だが見るがいい。昨晚彼の食事中、私に与えたこの肉をみるがいい』と。だがすべての人は彼を極悪人だと非難し、惡魔に満ちたものの如く叱責した。なぜなら彼が鶏の脚だと懸命に主張したものは、すべての人には實際は魚にみえたからである。そこでこの憐れな男は、奇蹟に仰天して、他の人が認めていることも自分も認めざるをえなかつた。遂に極道者は恥じて、周知の惡業を痛悔によつて清算した。すべての人の前で、彼は許しを乞い、自分が如何ほど惡意をもつていたかを示した。そして叛逆者が心をとりのどした後、肉は再びその姿にもどつたのである⁽³⁵⁾」と。

この史料の中には、聖フランシスの活動とそれを妨げようとするカタリ派との激しい応酬を読みとることができる。即

ちその *perfecti* に対して肉食を禁じていたカタリ派が、福音の掟に従つて肉を食べた聖フランシスを卑劣な策略をもつておとしめようとしたのである。しかし、奇蹟によつて鶏肉が *perfecti* も食べている魚に變つてしまったので彼らの企ては水泡に帰したのである。

また *Stephanus de Borbone O.P.* (+1261) は、次のような報告を与えている。即ち私が聞いたことだが、「聖フランシスがロムバルディアを旅し、ある教会へ祈るために入つた時、ある *paccharius* 或は *manichaens* があらわれた。この男は聖フランシスが民衆のうちにもつている成聖の評判をみて、彼を利用して民衆を誘惑し、信仰をくつがえし、聖務を輕蔑させようと欲した。この時、この教区の司祭が妾をもつていてという悪評が教区内にたつていたので、彼は聖フランシスにいつた。『一体この人の言葉を信じ、彼の業に崇敬を示すべきでしょうか。彼は妾をもち、娼婦の肉体に触れることによつて汚れた手をもつているのです』と。しかし聖者は異端者の策略を見抜き、教区民たちの面前でかの司祭の下に行き、彼の前に跪いていつた。『その手があの男のいうようなものか否か私は知りません。また例えそうであろうとも、聖なる祕蹟の効力を疑いえないことを私は知っております。しかもその手によつて神の多くの祝福と聖寵が神の民へ流れこむのですから、それによつてつかさどられるものへの畏敬と權威の故に私はその手に接吻致します』。聖フランシスはこういつてその司祭の前に跪いて彼の手に接吻し、なみいる異端者たちとその信者たち (*credentes*) を狼狽させた⁽³⁶⁾』と。この報告においてのべられている *paccharius* 又は *manichaens* はカタリ派の異名であり、最後の敘述にある *credentes* という言葉と合せてその意味を味うべきであろう。ここで *meritum* のない司祭の祕蹟を認めない異端というのは民衆宗教運動一般にあつた風潮であるが、あげられている名称からはもちろん、肉体的なものに対する激しい憎悪感からみても、カタリ派的背景は明瞭であると共に、それに正統信仰の立場から対決する聖フランシスの姿も極めて印象的である。実際、聖フランシスはカタリ派とその教説を知り、彼らの奸計に耐え、これを克服していったものと思

われる。しかしその闘いは論争という形でなされるよりも、行為による模範と精神的態度によつてなされたのである。そしてこの点を、われわれは聖フランシスの自筆文書の綿密な分析によつて明かにしうるであろう。

三

聖フランシスの信仰生活は、当時の民衆宗教運動に共通な個人主義・主観主義から湧きでたものであると同時に、クリストの人性に対する愛を通じてその聖体の唯一の保管者である客観的な聖職秩序と正統信仰に深くつながっていた。⁽³⁷⁾この正統的であると同時に新しい信仰態度は、彼自身の内から生じたものであり、特に何ものかに対する敵対意識から生まれたものではない。しかしそれが自らの確立した立場に真向から挑んでくる敵対者を意識し、これに対する厳しい警戒心をもつていたということは考えうる。

聖フランシスの自筆文書の中には、三位一体の神の唯一性が執拗なまでにくりかえされている。特に *Regula prima* 第二三章において、「私たちの創造者・贖い主・救い主である唯一 (solus) の真なる神以外に何が私たちにふさわしい**（38）** びを与えようか」といい、また *Epistola ad fideles* 第十章で、神を「彼は唯一 (solus) の善、唯一の至高者、唯一の全能にして讚美と栄光に満てるもの、唯一の聖なるものである」⁽³⁹⁾ といっている。*Cartula fratri Leoni data a. 1224* の中では、「あなたは聖なる主であり唯一の (solus) の神である」⁽⁴⁰⁾ と表現されている。*Epistola ad capitulum generale* の第二章では、「すべての意志は、全能なる御者の恩寵に助けられるかぎり神に向けられるべきである。またかの唯一の至高なる主 (solus ipsi summo Domino) の意にかなうことを望むべきである。なぜならそこでは、かの唯一なる御者 (ipse solus) が御旨のままに働き給うからである」⁽⁴¹⁾ といわれている。このように聖フランシスが唯一の神とならぶ如何なる最高の原理をも認めなかつたのは当然にしても、それが個人的な祈りの言葉の中でまで強調されていること

は注目すべきであろう。この執拗さは、カタリ派の二元論に対する意識を前提とした時にのみ納得のいく説明が与えられるのではなからうか。

また聖フランシスは、常に *rex coeli et terrae* を讃えており、その頻度は *pater sancte* という呼びかけをしるぐほどである。聖なる父で善なる神は単に天上のみでなく全地上の王でもあるのだ。聖フランシスは、聖書の中からこのような敘述を徹底的に集め、彼の自筆文書の中に鏤めている。これは、カタリ派による天上と地上、精神と物質、善と悪という二原理の分裂を再び統一しようという意図をも含んでいるのではなからうか。それ故 *Cartula fratri Leoni data a. 1224* における「あなたは善であり、すべての善であり、至高の善であり、生ける真の主なる神である」⁽⁴²⁾ という言葉や、*Regula prima* 第二三章の「彼は満ち溢れた善、すべての善、全体的な善、真の至高善であり、彼のみ *(solus)* が善く慈愛あり柔和で甘美であり、彼のみ聖く公正で真実で正しく、彼のみが好意あり罪なく浄いのである」⁽⁴³⁾ という言葉のうちに、天地万物の一切の善が唯一の神に集中され、善悪二元論が否定されているものと解釈される。そして、同じ *Regula prima* の文章が、「それ故何ものも我々を妨げたり、隔てたり、邪魔したりしてはならない」⁽⁴⁴⁾ という文脈上不可解な挿入句の後、再び讃美の祈りに移っていることは、カタリ派の謬つた神観念に対する意識を裏づけるものといつてよいであろう。

Regula prima 第二三章で聖フランシスは、「あなたの聖なる御旨とあなたの唯一の御子によつて、聖霊と共に、「あなたはすべての精神的なものと物質的なもの *(spiritualia et corporalia)* をお創りになり、あなたの似姿として私たちを造り樂園におき給うたが故に」⁽⁴⁵⁾ 神に感謝している。ここで使徒信経から自然にでてきそうな *visibilia et invisibilia* という言葉が用いられず、*spiritualia et corporalia* といわれていることは意味深長である。即ち聖フランシスは、精神世界のみならず、特に物質世界の創造をも神の御業として明確にしたかったのであるまいか。このような基本的確信か

ら、彼の極度に敬虔な自然観が生ずる。それはカトリ派的自然観と全く矛盾するものであつた。聖フランシスはその *Canticum fratris solis* や *Officium passionis* の中で神に由来する物質世界の善と美を歌いあげた。また *Verba admonitionis* 第五章によれば、「すべて天の下⁽⁴⁶⁾の被造物は自らその創造者に人間であるあなたよりもよく仕へ認め従う」のである。それ故人間は特に物質をも含めた被造物を通して神を讃えるべきであつた。ツェラーノのトマスは第二伝記一六五節で、自然世界は聖フランシスにとって神の「善性の最も透明な鏡⁽⁴⁷⁾」であつたといひ、第一伝記八〇節で、彼が「被造物の中に創造者の叡知とその権能と善性を観想した⁽⁴⁸⁾」といひ、また第二伝記一六五節で、「彼は美しいものの内に至高の美を認め、すべて善いものは彼に、『我々を創つた方は最も善い』と呼びかけた。事物に刻印された痕跡を通じて彼はあらゆる所に愛すべきものを求め、すべてのものを玉座に到る梯子とした⁽⁴⁹⁾」とのべている。このような聖フランシスの被造物に対する敬虔な愛を、もっぱらカトリ主義に対する反動から説明するのは間違いである。しかしここで、彼の個人的信仰から発する世界観が、カトリ派の二元論から生ずる暗い自然像を駆逐するのに適していたことは否定しえない。

さらに聖フランシスは、カトリ派の徹底的に否定した人間の肉体に対して如何なる態度をとつたであらうか。 *Verba admonitionis* 第五章には、「おお人よ、主なる神があなたを如何に高貴なものとなさつたかに注意せよ。なぜなら神は彼の愛する御子の似姿としてあなたの肉体と精神を創り給うたのであるから⁽⁵⁰⁾」とのべられている。また *Regula prima* 第二三章で、神は「すべて (totum) の肉体、すべての精神及びすべての生命を私たちすべてに与え給うた。そして今も与えておられる⁽⁵¹⁾」(dedit et dat)といわれている。即ち人間は全体的に靈肉ともに神によつてその似姿として造られ、今も保たれているのである。殊にここで三度 totum という言葉がくりかえされ、dedit et datといわれていることは重要である。そこには、如何なる意味での肉体蔑視をも許さぬ語気が感じられるといえよう。

しかしこれに反して S. Runciman は、「意識的にせよ無意識的にせよ、聖フランシスは物質を惡とみ、人間の靈魂を

動物の靈魂と同一視する点で、カタリ派の思想のあるものを吸収したのである」⁽⁵²⁾とか、「二元論的伝統は確かに聖フランスに影響を与えている。彼はそれを正統のクリスト教的形式につくりあげた」⁽⁵³⁾とかのべている。また P. Sabatier も、それを一時的な精神の虚脱状態で真の聖フランスとは違うといつて強く否定しながらも、「カタリ派の物質に対する輕蔑を想起させるような言行を聖フランスのうちにみいだすことは困難でない」⁽⁵⁴⁾といつてゐる。確かに聖フランスの中にこのような誤解を起させる多くの言葉を見出すことは可能であらう。しかしそれは S. Runciman のいふようなカタリ派的二元論の故でもなく、また P. Sabatier の説く如く一時的な精神の虚脱状態によるものでもない⁽⁵⁵⁾。それは神によつて造られた物質や肉体それ自体の高貴さに関するものではなく、人間自身から生ずる罪に関連してのべられているのである。墮落した人間にとつて肉体は罪の源泉となりうる。この意味で *Epistola ad fideles* 第九章にある、「また我々は肉体を恥ずかしめ輕んじなければならぬ。なぜなら我々はすべて罪によつて惨めとなり汚れ、厭うべき蛆虫となるからである」⁽⁵⁶⁾という勧告も理解されるべきである。しかしその場合に肉体がもつばら罪の源とされていると考えるべきではない。 *Verba admonitionis* 第十章には、「多くの人々は罪を犯したり、不当な処置を受けたりすると、しばしば敵や隣人に罪を帰せる。しかしそうではないのだ。なぜなら各人は敵を、即ちそれによつて罪を犯す肉体を自らの力のうちにもつているからである。それ故この敵を自己の力の内に引き渡し、いつもとらえておき、賢明に監視する僕は辛いである。なぜなら彼がこうしている限り、眼にみえるものであるうと眼にみえないものであるうと如何なる敵も彼を害することはできぬであろうから」⁽⁵⁷⁾という勧告がある。この文脈から明かなように、聖フランスは、単に肉体そのものでなく、利己的な自我のうちに罪の源をみているのである。したがつてツェラーノのトマスの第二伝記に散見する *frater corpus* とか *frater asinus* という愛称にみられる如く、⁽⁵⁸⁾聖フランスが精神の優位は認めながらも、肉体の中にある神の *imago* を尊重していたことは明かである。そしてこの態度は、正統派の中にすら新プラトン主義的禁欲主義に根ざす肉体蔑視の強

かつた当時において、カタリ派の陰鬱な肉体観に対する強い防壁となりえたものと考えられよう。

四

以上で形而上学的側面における聖フランシスとカタリ派の衝突は明かであるが、その対立はさらに救済論の領域にも及んでいる。救済論においても、托身の問題は両者の重大な争点であつたと思われる。Epistola ad fideles 第一章は、「かくも尊く聖にして栄光ある父の御言葉を、至高なる父は、天上より聖天使ガブリエルによつて、聖にして栄光ある処女マリアの胎内へ (in utero) 送り給うた。御言葉は彼女の胎内よりわれわれ人間の弱い真の肉身 (veram carnem humanitatis et fragilitatis nostre) を受け給うた。彼はすべてに優つて富んでおられたのに、彼の聖母と共に貧しさを⁽⁵⁹⁾選び給うた」と書かれている。ここでは一句一句カタリ派のクリスト仮現説が強く否定されている。クリストはマリアの聴覚によつてではなく、in utero へ受けいれられて人となつたのである。また彼は見かけの肉体ではなく、veram carnem humanitatis et fragilitatis nostre をとつたのである。さらに彼は見かけの地上生活ではなく、母と共に現実に貧しい暮らしを送つたのである。また有名なグレッチオの秣槽の物語が托身の現実性に対する聖フランシスの深い信仰を示すと共に、それがクリスト仮現説に対し如何なる鉄槌を加えたかは想像に難くない。

クリストの受難の描写においても、聖フランシスは迫真の描写を展開している。Epistola ad fideles 第一章において、「彼の汗は土の上に滴る血の滴りとなつた⁽⁶⁰⁾」というルカ伝の記述を特に選んでいる。外見だけの受難に対してクリストはそれ程恐れる必要はなかつたはずである。さらに聖フランシスは Regula prima 第二三章で、「彼の十字架と血 (et sanguinem) と死によつて捕われたるわれわれを贖うことを欲し給うた⁽⁶¹⁾」が故に神に感謝している。ここでは、per crucem et mortem という慣用句に et sanguinem という語が附加されているのは偶然ではない。まさにその

点で、聖フランシスは受難の犠牲的性格を詳細に示したのである。救いは単に精神的な正しい認識によつてではなく、クリストの現実の死によつてあるのである。クリストの受難の現実性の強調は、精神主義的なカタリ派に対する修正をも含むとみることができよう。この点ではさらに聖フランシスの聖痕が、グレゴリオ九世の讃美の詩、*Caput draconis* の中で異端を克服するものとして称揚されていることにも留意すべきであろう。⁽⁶²⁾

クリストの受難によつて救われることを欲する者は、聖体の祕跡における彼の現存を信じ、これを拝領しなければならぬ。だがカタリ派によつて特に非難されたのはこの祕跡であつた。これに対し聖フランシスの自筆文書は到る所でこの祕跡の重要性を強調しているが、特に *Verba admonitionis* 第一章では、聖体におけるクリストの現存を認めぬ者は「わづらひである」(*damnati sunt*)⁽⁶³⁾として断罪されている。また同所では、「また彼が聖なる使徒たちに眞の肉体をもつて (*in vera carne*) 現われ給うたように現在われわれには聖なるパンのうちに現われ給う。そして使徒たちが彼の肉体の (*carnis suae*) 注視において彼の肉体 (*carnem suam*) のみを見たのに、靈的眼をもつて観想しつつ彼が主なる神であると信じたように、われわれは肉体の眼をもつてパンとぶどう酒をみるが、それが彼の生きた眞の (*vivum et verum*) 至聖なる御体と御血であると堅く信すべきである」⁽⁶⁴⁾とのべられている。ここでもテキストの強調は歴然としている。*in vera carne* はクリストの眞の托身を強調しているのであるが、これと呼応して *vivum et verum* は聖体におけるクリストの現存を力説しているのである。また聖フランシスは *Epistola ad fideles* 第一章で、「また彼はわれわれすべて (*omnes*) が彼によつて救われ、清い心と貞潔な体をもつて彼を拝領することを望み給う。しかし彼を拝領し、彼によつて救われることを望むものは少ない。彼の軀は軽く、荷は軽いにもかかわらず」⁽⁶⁵⁾とのべている。ここでは、聖フランシスが個々の信者にではなくすべての信者に聖体拝領を求めていることに注目すべきであろう。この要求は彼の内面に聖体の祕跡への新しい感激が溢れていたが故であることはもちろんであるが、当時聖体拝領する信者の数が一般に

少かつたという事情への配慮以外にも、カタリ派の冒瀆からこの祕蹟を守ろうとする意図を暗に含んでいたものと考えてよいであろう。

五

カタリ派の *perfecti* は彼らの二元論に基いて、断食を始め厳しい禁欲の生活を送った。彼らは断食のために蒼白く痩せこけ、しばしば髭を伸ばし、当初は裸足で、修道士に似た服を着て、後には頭巾とマントをつけ、多くの荷物をもたずに村や町を巡歴したという。したがって外見は初期のフランシスコ会士に似ていたようである。しかしカタリ派が、悲しげな顔と涙に満ちた声をして、悪に満ちた世界を厳肅に歩んだのに反し、⁽⁶⁶⁾フランシスコ会士には、*Regula prima* 第七章の「また兄弟たちは悲しげな様子や陰気な偽善者の態度を示さぬよう気をつけねばならない。彼らは主において喜び、快活で、適当に愛想よくなければならない」という掟が⁽⁶⁷⁾あつた。また *Epistola ad fideles* 第六章では、「われわれは断食をし、悪徳と罪と余計な食物や飲物を禁じ、かつカトリック的 (*esse catholici*) でなければならない⁽⁶⁸⁾」といわれている。即ち聖フランシスは断食や節制をもちろん非難してはいないが、それはカトリック的に行うべきで、特にカタリ派的色彩をもつことを嫌つたのである。Jordanus de Jano の *Chronica* 第十一章及び十二章によれば、聖フランシスの東方滞在中、代理者たちは週三日の断食と肉食及び乳入りの食物の制限を定めたが、このことは聖人を激怒させたという⁽⁶⁹⁾。この記述も、その規定のカタリ派的色彩が聖フランシスの氣にいらなかつたのだ、と解釈できぬこともないであろう。

カタリ派は、物質否定の精神から、その儀式を全く飾り氣のない礼拝所でおこなつた。そこには白い布を敷いた机と新約聖書のほかには何もなかつた。彼らは聖画像を悪魔の造つたものとして非難した。殊に十字架を悪神の勝利とクリストの屈辱の印として忌み嫌つた。これに対し、*Testamentum* 第二章には、「主イエズス・クリストよ、私たちはここで

も、また全世界のあなたの教会であなただを拝みます。またあなたが聖なる十字架によつて世界を贖ひ給うたが故に、あなたを祝福します⁽⁷⁰⁾。とある。またツェラーノのトマスの第一伝記四五節によると、聖フランシスとその初期の弟子たちは、教会堂や十字架をはるか彼方にみただけでも、それに向かつて祈つたといわれている⁽⁷¹⁾。

またカトリ派は当然カトリック教会の聖務日課を否定していた。だが Testamentum 第十章は、「また正規の聖務日課を唱えず、他の方式に変える (alio modo variare) ことを望み、カトリックでないものがあるのをみつけたら、すべての兄弟たちはどこにしようと、彼を発見地の近くの属管区長の下につれていくよう従順の掟によつて義務づけられる⁽⁷²⁾」とのべている。即ち聖フランシスは、正規の聖務日課を厳守させることによつて異端の危険を放逐しようとしているのである。

カトリ派はまた宣誓を禁じ、また殺人を法律上の刑の執行においても禁じていた。宣誓について聖フランシスは何ものべていない。しかし裁判については、Epistola ad fideles 第五章に明瞭な勧告がある。即ち「他人を裁く権能を受けた人々は、憐みをもつて裁くべきである。恰度自分たちが主から憐みを得ることを欲するように。なぜなら憐みをほどこさぬ人々に対しては憐みなき裁きが下されるであろうから⁽⁷³⁾」と。聖フランシスはここで裁判そのものを決して否定していない。ただ裁判者が福音に則つた正しい心構えをもつよう勧めているのである。

最後にカトリ派とフランシスコ会の清貧のあり方の相違に注目すべきであろう。A. Borst はカトリ派の清貧理想に潜む矛盾を指摘している。実際彼らは清貧を強調した。perfecti は全財産をカトリ派の教会に贈与し、自らの肉体労働によつて生活しなければならなかつた。なるほど個人として彼らは貧しかつた。しかし彼らの教会は富んでいたのである。そのため、彼らは救霊のために活動する以外に、商人として市場にでて教会のために儲け仕事に従事することすらあつた⁽⁷⁴⁾。それに反し、聖フランシスは入会者に全財産を貧者に施すよう主張した。またこの入会者の財産処分によつてのフラ

ンシスコ会士たちが介入することを禁じた。したがって金満家の入会者があつても、会が裕福になることはなかつた。またフランシスコ会士たちは、労働の報酬として自分の仲間の最底生活に必要なものしか受けとれなかつた。特に彼らは貨幣を絶対に受領できなかつた。⁽⁷⁶⁾ *Regula prima* 第八章の「すべての兄弟たちは、不正な利得を求めて徘徊せぬように気をつけるべきである」という規定は特に重要である。これらの点で、外觀の類似にもかかわらず、カタリ派とフランシスコ会の間には清貧に関してもかなりの対立と修正があつたことは見落されてはならないのである。

結

以上カタリ派と聖フランシスとが如何なる關係にあつたかを考察してきた。カタリ派は聖フランシス在世当時において、カトリック教会に敵対する最大の異端であつた。そしてこれに対しては、やがてアルビジョア十字軍が展開されることになる。しかし、この異端を真に駆逐したのは武力ではなかつた。聖ドミニコを中心として展開された組織的な説教活動が大きな役割を果たしたことはいうまでもない。しかし、それほど目立ちしなかつたが、聖フランシスとその弟子たちの働きも無視することができない。フランシスコ会はドミニコ会のようにカタリ派との論争において華々しい活躍はしなかつた。しかし聖フランシスはカタリ派の教義とその危険とを充分に知つていた。そして彼の新しい信仰運動は、それ自体カタリ派の教義と活動の根本的否定であつた。聖フランシスが如何にカタリ派を意識し、これの克服につとめているかは、彼の自筆文書を中心とする史料の検討から明かである。そこにはカタリ派の二元論と物質及び肉体の軽視について、またクリスト仮現説と聖体の祕跡の否定について、さらには禁欲と清貧の生活のありかたに到るまで、聖フランシスが与えた見事な解答がみいだされるであろう。

註

- (1) アッシジの聖フランシスコと宗教運動」史学四一巻四号、六三—八四頁、昭和四四年三月刊。
- (2) A. Borst, Die Katharer, Stuttgart, 1953, S. 117.
- (3) Ibid., S. 119.
- (4) M. H. Vicaire, O. P., St. Dominic and his Times, (translated from French by K. Pond) London, 1964, p. 49-53.
- G. G. Coulton, Five Centuries of Religion, II, Cambridge, 1939, (first published in 1927) p. 137-138.
- (5) G. Lef, Medieval Thought, St. Albans, 1958, p. 15-16.
- (6) Bernardus Morlanensis の De contemptu mundi 及び Petrus Damiani の De perfectione monachi 及び Vita Romualdi の Guigo の Meditationes なども想起されるべきである。
- (7) K. Eber, Franziskus von Assisi und die Katharer seiner Zeit; in Archivum Franciscanum Historicum, (51) 1958, S. 227. Anm. 1.
- (8) Borst, Ibid., S. 67-70.
- F. Heer, The Medieval World, (translated from German by J. Sondheimer) New York, 1963, p. 205-206.
- (9) Borst, Ibid., S. 98-108.

アッシジの聖フランシスコとカタリ派

Heer, Ibid., p. 207-208.

- (10) Borst, Ibid., S. 101. bes. Anm. 11; 239.
- (11) Ibid., S. 147; 152; 154, bes. Anm. 12; 159, bes. Anm. 11.
- (12) Ibid., S. 145-150; 167.
- (13) Ibid., S. 162.
- (14) Ibid., S. 163.
- (15) Ibid., S. 167.
- (16) Ibid., S. 172. この考えの中には煉獄の否定も含まれている。人間は死後すぐに最終的に判決を与えられる。したがって死者のための祈りはカタリ派にとって無意味であった。Ibid., S. 86; 171.
- (17) Ibid., S. 175.
- (18) この点で、カタリ派はその理論的基礎の相違にもかかわらず、他の宗教的清貧運動と結合しやすかった。
- (19) この点から、カタリ派克服を当初の使命としたドミニコ会も、自らも厳格な肉食の禁を採用していることは興味深い。
- (20) H. Grundmann, Religiöse Bewegungen im Mittelalter, 2te Auflage, Darmstadt, 1961, S. 22, Anm. 17.
- (21) この約束は *conventientia* 及び *convenesa* 又は *pactum* と呼ばれた。Borst, Ibid., S. 199, Anm. 26.
- (22) これは当時の宗教運動にみられる共通の特色である。フランシスコ会及び *Regula prima* 及び *fidelis persona*。

Regula bullata によれば *amicus spiritualis* という名称で *credentes* に相当するものがあったことがわかる。しかし、彼らのフランシスコ会士たちに対する援助は、病気の場合と衣服の調達に限られており、カタリ派をはるかにしのぐ厳格さがうかがわれる。M. D. Lambert, *Franciscan Poverty*, London, 1961, p. 41. なお原典は H. Böhrer, *Analekten zur Geschichte des Franziskus von Assisi*, 3te Auflage, Tübingen, 1961, S. 8. (*Regula prima* 第十章) 及び S. 21. (*Regula bullata* 第四章)

(23) Borst, *Ibid.*, S. 197, Ann. 22.

(24) 最初のシニニコ会女子修道院 'Notre Dame de Prouille' の *cartularium* にある記録にも注意されたい。「彼女たちはかつて良い人々に従っていた。彼らは、異端といわれ、善い聖なる生活を送り、周に三日断食し、肉を食べなかつた」(*Erant de illis bonis hominibus, qui dicebantur heretici et vivebant bene et sancte et ieunabant tribus diebus in septimana et non comedebant carnem.*) Grundmann, *Ibid.*

(25) この点の後、フランシスコ会の会則厳守派、特にその代表者 Petrus Johannes Olivi によるカタリ派の評価を招いた。E. Benz, *Ecclesia Spiritualis*, Stuttgart, 1964, (1ste Aufgabe 1934) S. 287-288.

(26) Borst, *Ibid.*, S. 75-76; 83-84; 201; 217. カタリの穩健

派の中では、聖体を象徴また記念とみる考えもあった。

(27) *perfecti* は一日に二百五十回 *Pater noster* を唱えるものと義務づけられた。Borst, *Ibid.*, S. 191.

(28) *Ibid.*, S. 221.

(29) Grundmann, *Ibid.*, S. 70-156.

(30) P. Sabatier, *Life of St. Francis of Assisi*, (translated from French by L. S. Houghton) New York, 1916, (first published in London, 1894) p. 40-41.

(31) *Ibid.*, p. 44. の市長 Giraldo di Gilberti とする K. Eber は P. Sabatier の拠つてゐるインヤンと三世の書簡だけから、彼を異端者と決定するのは困難だといつてゐる。Eber, *Ibid.*, S. 239, Ann. 1.

(32) イタリアでカタリ派の教会が *ecclesia Franciae* または *ecclesia Francigenarum* と呼ばれたこと、及び彼ら自身が *Francisci* と呼ばれたこと、聖フランシスコの名前との関係、一考や誤りなどある。Borst, *Ibid.*, S. 243, Ann. 3.

(33) Grundmann, *Ibid.*, S. 144-148.

(34) Borst, *Ibid.*, S. 119.

(35) *Analecta Franciscana*, Tom. X. Quaracchi, 1941, p. 177-178.: In eleemosynarum datione animarum lucrum potius quam carnis subsidium requirebat, et non minus in dando quam in accipiendo se ipsum ponebat caeteris in exemplum.—Cum enim apud Alexandriam Lombard-

iae verbum Dei praedicaturus accederet, et a quodam viro timente Deum famaеque laudabilis devote fuisset susceptus hospitis, rogatus ab eo, ut propter sancti Evangelic observantiam de omni apposito manducaret, annuit benigne, hospitis devotione devictus. Accurrit ille festinus, et caponem septennem studiose homini Dei praeeparat manducandum. Sedente ad mensam pauperum patriarcha et familia iucundante, extemplo adest ad ostium filius Belial, omni gratia pauper, rerum opportunarum simulans paupertatem. Proponit sagaciter amorem Dei eleemosynam expetendo, et voce lacrimabili propter Deum sibi postulat subveniri. Recognoscit sanctus nomen super omnia benedictum et dulcius sibi melle; gratissime membrum suscipit avis apositae, ac pani superpositum petenti transmittit. Quid plura? Reservat infelix datum, ut sancto inferat opprobrium.

In crastinum populo congregato sanctus more suo praedicat verbum Dei. Irrugit subito sceleratus ille, membrum caponis ostendere nititur omni plebi. «Ecce», garrit, «qualis est Franciscus iste qui praedicat, quem honoratis ut sanctum: videte carnes quas mihi sero dum comederet dedit». Increpant illum pessimum

universi, et velut daemone plenum omnes obiurgant. Piscis revera omnibus apparebat quod nitebatur ille asserere membrum fore caponis. Nam et ipse miser, obstupefactus miraculo, compulsus est confiteri quod caeteri fatebantur. Erubuit tandem infelix, et facinus deprehensum poenitentia diluit. Coram omnibus veniam postulavit a sancto, exponens quam habuit nefariam voluntatem. Redeunt carnes ad suam speciem, postquam rediit praevaricator ad mentem.

(28) L. Lemmens, Testimonia minora saeculi XIII de S. Francisco Assisiensi, Quaracchi, 1926, p. 93-94: Audivi, quod, cum beatus Franciscus iret per Lombardiam, quidam paccharius sive manichaеus, cum ingressus fuisset quandam ecclesiam ad orandum beatus Franciscus, videns famam sanctitatis, quam habebat in populo, occurrit ei et volens per eum populum sibi allicere et fidem subvertere et officium sacerdotale contentibile reddere, cum parochialis sacerdos esset infamis in parochia de hoc, quod concubinam teneret, dixit dicto sancto: «Ecce, estne credendum dictis huius, et factis eius aliqua reverentia exhibenda, qui concubinam tenet et manus habet pollutas, carnes meretricis tractando?». Attendens autem vir sanctus haeretici

malitiam, coram parrochianis venit ad sacerdotem illum, et flectens genua ante eum ait: «Si tales sunt manus illius, qualis iste dicit nescio; et si etiam tales essent, scio quod non possunt inquinare virtutem et efficaciam divinorum sacramentorum. Sed, quia per manus istas multa beneficia Dei et carissimata populo Dei fluunt, istas osculor ob reverentiam eorum, quae ministrant, et cuius auctoritate administrant ea». Et hoc dicens et flectens genua coram sacerdote illo, manus eius osculabatur, confundens haereticos et eis credentes aderant.

(37) 「トハンスの聖トハンスと宗教運動」を参照せよ。

(38) Böhmer, S. 17: ...nihil aliud placeat et delectet nos nisi Creator et Redemptor et Salvator noster solus verus Deus,...

(39) Ibid., S. 37: ...qui est solus bonus, solus altissimus, solus omnipotens, admirabilis, gloriosus et solus sanctus ...

(40) Ibid., S. 47: Tu es sanctus Dominus Deus solus,...

(41) Ibid., S. 39: ...omnis voluntas, quantum adiuvat gratia omnipotentis ad Deum dirigatur, soli ipsi summo Domino inde placere desiderans, quia ipse solus operatur, sicut sibi placet.

(42) Ibid., S. 47: Tu es bonum, omne bonum, summum bonum, Dominus Deus, vivus et verus.

(43) Ibid., S. 17: ...qui est plenum bonum, omne bonum, totum bonum, verum et summum bonum, qui solus est bonus, pius et mitis, suavis et dulcis, qui solus est sanctus, iustus, verus et rectus, qui solus est benignus, innocens et mundus,...

(44) Ibid., S. 17: Nihil ergo nos impediatur, nihil separet, nihil interpollet.

(45) Ibid., S. 16: ...quia per sanctam voluntatem tuam et per unigenitum Filium tuum cum Spiritu Sancto creasti omnia spiritualia et corporalia et nos ad imaginem tuam et similitudinem factos in paradiso posuisti. なるべしに留意すべし。聖トハンスが物質的なものを神の imago とする、精神的なものを神の similitudo とする使用は、むしろある。これは精神も物質もともに神の似姿ではあるが、精神の方がより明確に神を写している点で上位にあることを示すのである。

(46) Ibid., S. 25: Et omnes creature, quae sub celo sunt, secundum se serviunt et cognoscunt et obediunt creatori suo quam tu.

(47) Analecta Franciscana, Ibid., p. 226: ...clarissimo speculo bonitatis.

(49) Ibid., p. 59: ...contemplans in creaturis sapientiam Creatoris, potentiam et bonitatem eius.

(49) Ibid., p. 226: Cognoscit in pulchris Pulcherimum; cuncta sibi bona: 《Qui nos fecit est optimus》 clamant. Per impressa rebus vestigia insequitur ubique dilectum, facit sibi de omnibus scalam, qua perveniatur ad solium.

(50) Böhmer, Ibid., S. 29: Attende, o homo, in quanta excellentia posuerit te Dominus Deus, quia creavit et formavit te ad imaginem dilecti Filii sui secundum corpus et similitudinem suam secundum spiritum.

(51) Ibid., S. 17: ..., qui totum corpus, totam animam et totam vitam dedit et dat omnibus nobis,...

(52) S. Runciman, *The Medieval Manichee*, Cambridge, 1960, (First edition 1947) p. 129.

(53) Ibid., p. 179.

(54) Saatie, Ibid., p. 41, Note 2. 彼はその実例として、*Verba admonitionis* 第十章及びシホラーノのメモの第二伝記の三節の語句をあげている。しかし、彼によれば、このような個々の物質軽視の発言は、*Canticum fratris solis* の如く全被造物のうちに神の善性の業と永遠の美の輝きをみた聖フランシスの真の精神と全く矛盾するといふ。

(55) Ibid.

アシジの聖フランシスとカタリ派

(56) Böhmer, Ibid., S. 36: Et habeamus corpora nostra in obprobrium et despectum, quia omnes per culpam nostram sumus miseri et putridi, fetidi et vermes,...

(57) Ibid., S. 30: Multi sunt, qui dum peccant vel iniuriam recipiunt, sepe inculcant inimicum vel inimicum vel proximum. Sed non est ita; quia unusquisque in sua potestate habet inimicum, videlicet corpus, per quod peccat. Unde beatus ille servus, qui talem inimicum traditum in sua potestate semper captum tenuerit et sapienter se ab ipso custodierit, quia, dum hoc fecerit, nullus alius inimicus visibilis vel invisibilis ei nocere poterit.

(58) frater corpus アシジの言葉は「二六節」「二九節」「一一一節」の如く。*frater asinus* アシジの言葉は「一六節」の如く。

(59) Böhmer, Ibid., S. 34: Istud Verbum Patris tam dignum, tam sanctum et gloriosum nuntiavit altissimus Pater de celo per sanctum Gabrielem angelum suum in utero sancte et gloriose Virginis Marie, ex cuius utero veram recepit carnem humanitatis et fragilitatis nostre. Qui, cum dives esset super omnia, voluit tamen ipse cum beatissima Virgine matre sua eligere paupertatem.

(60) Ibid., S. 34: Et factus est sudor eius sicut gutte

sanguinis decurrentis in terram.

- (16) Ibid., S. 16: ...per crucem et sanguinem et mortem ipsius nos captivos redimi voluisti. 汝等' Epistola ad fideles 第一章に於て' per proprium sanguinem suum ヲ用いて救済が爲め (Ibid., S. 34)' 亦て Officium passionis Domini に於て proprio sanctissimo sanguine suo ヲ用いて我等を救ふ (Patres Collegii S. Bonaventurae, Opuscula Sancti Patris Francisci, Quaracchi, 1949, 3ed, p. 135)° ヲ用いて我等を proprium, proprio 血の體面を以て用いて救はるゝに如く用ひしことを此の箇所にも見ゆ。
- (17) Analecta Franciscana, Ibid., p. 401.
- (18) Böhmer. Ibid., S. 27-28.
- (19) Ibid., S. 28: Et sanctis apostolis in vera carne, ita modo se nobis ostendit in sacro pane; et sicut ipsi intuitu carnis sue tantum carnem suam videbant, sed ipsum Dominum Deum esse credebant oculis spirituum libus cotelplantantes, sic et nos videntes panem et vinum oculis corporeis videamus et credamus firmiter eius sanctissimum corpus et sanguinem esse et verum.
- (20) Ibid., S. 34: Et vult, ut omnes salvemur per ipsum et recipiamus ipsum puro corde et casto corpore nostro. Sed pauci sunt, qui velint eum accipere et salvi esse per eum, licet eius iugum suavis sit et onus ipsius leve.
- (21) Böhmer, Ibid., S. 6: Et caveat sibi fratres, quod se ostendant tristes extrinsecus et nubilos hypocritas, sed ostendant se gaudentes in Domino, hilares et convenerter gratiosos. 亦た聖トマスは云ふに「悲しむ顔や我々ハ用ゐ (tristem faciem praetendentem) 好まざるべし」云々ト云フの條に於て「悲しむ顔」云々ト云フ。
- (22) Analecta Franciscana, Ibid., p. 205-206)
- (23) Böhmer, Ibid., S. 35: Debenus etiam ieiunare et abstinere a vitis et peccatis et superfluitate ciborum et potus et esse catholici.
- (24) L. Hardick, Nach Deutschland und England—Die Chroniken der Minderbrüder Jordan von Giano und Thomas von Eccleston—Franziskanische Quellschriften, Bd. 6. Werl/Westf., 1957, S. 46-49.
- (25) Böhmer, Ibid., S. 24: Adoramus te, Domine Jesu Christe, hic et ad omnes ecclesias tuas, que sunt in toto mundo, et benedicimus tibi, quia per sanctam crucem tuam redemisti mundum.
- (26) Analecta Franciscana, Ibid., p. 35-36.
- (27) Böhmer, Ibid., S. 26: Et qui inventi essent, quod non facerent officium secundum regulam, et vellent alio modo variare, aut non essent catholici, omnes fratres,

- (99) Borst, Ibid., S. 206-7.
 (100) Böhmer, Ibid., S. 6: Et caveat sibi fratres, quod se ostendant tristes extrinsecus et nubilosos hypocritas, sed ostendant se gaudentes in Domino, hilares et convenerit gratiosos. 亦た誰にランンスは全士たが「悲しう顔や繋ぐ」ハヤ (tristem faciem praetendentem) 好まなかつた。アンハラーのメモの第二に記し「節はのびつる」。
 (Analecta Franciscana, Ibid., p. 205-206)
 (101) Böhmer, Ibid., S. 35: Debemus etiam ieiunare et abstinere a vitis et peccatis et superfluitate ciborum et potus et esse catholici.
 (102) L. Hardick, Nach Deutschland und England—Die Chroniken der Minderbrüder Jordan von Giano und Thomas von Eccleston—Franziskanische Quellenschriften, Bd. 6. Werl/Westf., 1957, S. 46-49.
 (103) Böhmer, Ibid., S. 24: Adoramus te, Domine Jesu Christe, hic et ad omnes ecclesias tuas, que sunt in toto mundo, et benedicimus tibi, quia per sanctam crucem tuam redemisti mundum.
 (104) Analecta Franciscana, Ibid., p. 35-36.
 (105) Böhmer, Ibid., S. 26: Et qui inventi essent, quod non facerent officium secundum regulam, et vellent alio modo variare, aut non essent catholici, omnes fratres,

ubicumque sunt, per obedientiam teneantur, quod ubicumque invenerint aliquem ipsorum, proximori custodi illius loci ubi ipsum invenerint, debeant representare.

(73) Ibid., S. 35: Qui autem potestatem iudicandi alios receperunt, iudicium cum misericordia exerceant, sicut ipsi volunt a Domino misericordiam optinere. Iudicium enim sine misericordia erit illis, qui non fecerint misericordiam.

(74) Borst, Ibid., S. 105-106.

(75) Vgl. Regula prima, c. 2, 7 et 8; Regula bullata, c. 2, 4, 5 et 6; Testamentum c. 4, 5 et 7. (Böhmer, Ibid., S. 1-2; 5-7; 20-22; 25-26)

(76) Böhmer, Ibid., S. 7; ...caveant omnes fratres, ut pro nullo turpi lucro terras circumneant. K. Eßer の箇条にラテラン公会議の教令第十六条の影響をみている。そしてこの条項の反カタリ派的派色彩を指摘している。K. Eßer. Ibid., S. 263. ann. 1.